

地域社会・東アジアのなかの浄光寺

熊本学園大学

小川弘和

1. はじめに-肥前東妙寺文書のなかの浄光寺-

浄光寺は、西大寺末寺として全国的な律宗ネットワークのなかに位置づけられていた寺院であり、中世後期をとおして一定の寺勢を誇ったものの、戦国争乱のなかで焼亡した。このため、自身は一切の文書・典籍を残しておらず、その歴史については、他の律宗寺院の史料中での断片的言及と、考古学的知見に拠るしかない。よってそれらをひろく当該期の九州や玉名郡域の情勢のなかに位置づけつつ、浄光寺の沿革を探っていくことにしよう。

その名がはじめて現れるのは、大宰府宛の永仁6年(1298)7月14日「太政官符」(東妙寺文書)である。肥前国神崎荘内にあった律宗寺院である東妙寺と、近傍の尼寺・妙法寺は、寺域内での殺生禁断を要望した。それを京都の公家政権が許可し、九州の行政を統括する大宰府に、その実施を命じたというのが、その概要だ。

この太政官符に引用された東妙寺住持唯円の要望書には、「当寺者、為無仏世界度衆生、去弘安年中草創地也、妙法寺者、建立以後、即令止住尼衆、歴四十余廻之星霜畢、彼是両寺、依有勅願、共口祈天長地久御願事、于今無退転」と記されている。東妙寺は弘安年間(1278～88)、妙法寺は永仁6年から遡ること40年程、おおよそ1260年頃の創建で、ともに「勅願」、つまり天皇の祈願寺であるという。ここで両寺が求めている「殺生禁断」とは、本来は聖域であるべき寺院敷地での殺生を禁じるという、仏教にとっては当然の論理だが、転じて中世には、寺域や寺領荘園において、他者、特に殺人を旨とする武者などの介入を排除し支配権を確立するために掲げられていった。

そして両寺がこの要求を正当化するための類例として、「且肥後国浄光寺者、沙門惠空私建立之寺院也、雖非勅願、已被下宣旨、被禁断殺生畢」と、その名を挙げられたのが、浄光寺なのである⁽¹⁾。曰く「浄光寺は惠空が私的に創建した寺院であり、勅願寺ではないにもかかわらず、すでに宣旨(天皇の命)によって殺生禁断を実現している。」ならば勅願寺である東妙・妙法両寺は当然…という論理が展開されている。ここから読みとれる創建期の浄光寺についての論点は、鎌倉時代後期における律宗の全国的展開のなかで、肥前東妙寺・妙法寺と前後して成立した寺院であること。勅願寺ではないにもかかわらず、勅願寺並の待遇を得ていた以上、公家政権に圧力・

影響を与えうる存在を後ろ盾としていたこと。それは鎌倉幕府以外には考えられず、その創建にも幕府の一定の関与があったとみるのが自然であること。その際、幕府と現地の諸勢力との間で、さまざまな利害の調整があったであろうこと、といったところだろう。そこでまず、鎌倉後期における律宗の展開のありさまを、中世日本の仏教全体のなかに位置づけながら、概観しておこう。

2. 東アジアのなかの日本中世仏教

日本の仏教は律令国家のもとで整えられた南都六宗（三論・成実・法相・俱舎・華嚴・律）を基礎とし、これに平安時代初頭にもたらされた天台・真言両宗が加えられた八宗が、中世には国家安穩などの祈禱を担う正統仏教とされていた。これに対し、いわゆる「鎌倉新仏教」は異端とされており、かつて考えられたほど時代を代表する宗派ではなかったというのが、現在の定説である（黒田 1975 など）。浄光寺が属した真言律宗は、奈良の西大寺を再興した叡尊（1201-90）が、戒律をつうじて真言密教の深奥を極め、もって衆生の救済を目指したもので、貧者救済などの社会事業に努めたことはよく知られている。ふつう、正統仏教内部の改革派として位置づけられる。

古代の東アジア世界では、遣唐使に象徴される国家的使節が、唐を中心とする対外関係の軸だったが、中世の対外関係は、中国江南沿岸部を拠点とする商人たちのネットワークを基盤とするものになっていた。日本から中国を目指す留学僧は商人の船に便乗して往来し、商人は自身の信仰する宗派の寺院を東アジア各地の港湾都市に建立していく。仏教と商人のネットワークは、リンクして東アジア全体に張り巡らされていった。

そして日本中世の仏教もそのなかにあった。たとえば比叡山延暦寺は、大宰府近傍の大山寺を支配に収めて対宋交易の窓口とし、そのもとに宋商たちを編成していく一方、足元に望む琵琶湖の水運を軸に、京都と北陸との間の交通体系も掌握していった（渡邊 2010）。このような、学術交流や布教のルートと物流との一体的整備は、院政期に、列島各地における末寺・荘園の獲得のかたちで進められた。

ところが鎌倉時代に入ると、「鎌倉新仏教」の臨済宗が、対外関係での存在感を高めてくる。聖福寺が、博多居留の宋人たちが建立した堂舎を起源に、栄西を開基に迎えて成立したとされるように、南宋で隆盛して宋商たちに受容された臨済宗は、ほぼリアルタイムで博多や大宰府にもちこまれた。さらに、摂家将軍・九条頼経の父であることを背景に、鎌倉時代前期の公家政権を主導した九条道家は、京都に東福寺を建立。建長7年（1255）に完成した、その開山に迎えられたのは、渡宋経験を持つ禅僧・円爾。かくして宋・博多・大宰府・京都を結ぶ、臨済宗と日宋交易との複合的ネットワークが確立していく。

一方、鎌倉幕府と臨済宗との本格的な接触は、蒙古襲来前後に降ることになる。東国から出発した鎌倉幕府は、承久の乱での勝利で西国への影響を強めていく。そのうえで、幕府を軸に臨むこととなったモンゴルとの二度にわたる戦争と、その後の警戒体制の長期的継続は、鎌倉幕府が西国、特に最前線となった九州への影響を拡大・深化する決定的なきっかけとなった。戦線の維持には鎌倉-京都-九州を結ぶ交通体系の掌握・管理が欠かせない。そのため、交通の要衝に点在する所領荘園の多くは幕府によって接收されていく。

それとあわせて、幕府は臨済宗との関係を強めて、その勢力拡大を後推しした。内外の高僧を迎えて建長寺をはじめとする都市鎌倉の臨済宗寺院は急速に整備されていき、臨済宗ネットワークの東のターミナルとしての位置を確立した。その一方、列島各地には、地域における交通の要衝を中心に、新たな臨済宗寺院が次々と創建されていく。その受け皿となったのは、幕府と関係を深めることで地位の保全や向上を期待した、地域の武士・領主たちであった。そして臨済宗とならんで、鎌倉幕府の交通掌握政策を担う結果となったのが、実は真言律宗だったのである。

3. 真言律宗・鎌倉幕府と九州社会

叡尊らの西大寺流真言律宗教団は1240年代から活動を本格化させていくが、彼と公・武両政権の主要人物とが強く結びつくきっかけとなったのは、全国を襲った正嘉2年(1258)の飢饉であった。その克服が課題となるなかで、貧者救済を掲げる真言律宗は公・武両政権に注目され、まず文応元年(1160)には、公家政権の主催者・後嵯峨院の側近であった葉室定嗣の帰依を得、また弘長2年(1162)には鎌倉の北条時頼に招かれて、その保護を得ていくようになる(網野1974)。中世には都市的場の四隅をはじめとする交通の要衝は、さまざまな人々が行き交う境界でもあり、生ける貧者が群がるとともに死者がうち捨てられる場でもあった。貧者救済と死者の葬送供養を旨とした叡尊教団は、公・武両政権の保護のもとに、このような交通の要衝に末寺を得て、あわせてその近傍に位置する橋や港湾の管理も委ねられていく。その結果、彼らは延暦寺が掌握していた日本海-小浜-琵琶湖-京都を結ぶ交通ルートなどにも食い込んでいった(松尾2010)。

そして叡尊教団と幕府との関係は、モンゴルとの対決が不可避となっていく1260年代後半から、さらに深いものとなっていく。文永5年(1268)の四天王寺での勤行を皮切りに、彼は公・武両政権の求めに応じて異国調伏・戦勝祈願の法会・祈祷をとりおこなうこと数度に及ぶとともに、その教線は西国、さらに九州へと伸びていくことになる。博多西南部・那珂川に面する位置には、九州における律宗の拠点と目される大乘寺が存在した。亀山院(1249-1305)勅願と推定

される大乘寺の創建は13世紀末ないし14世紀初頭頃と考えられる。また、幕府の九州支配の拠点であった鎮西探題の御所は、その近隣であったとも推定されている。鎌倉時代末から南北朝時代にかけて、西大寺-大乘寺-九州各地の律宗寺院という体制が整えられて、九州各地にその教線が展開していくとともに、その環境・立地からみて、鎮西探題のもとで大乘寺が、博多港と那珂川の水上交通の管理を担っていた可能性が指摘されている（松尾 2010）。

第1図は、諸史料にもとづき中世九州における西大寺末寺の分布を示したものである⁽²⁾。それらが沿岸部を中心とする交通の要衝と目される場に集中していることがみてとれよう。たとえば、先述の東妙・妙法両寺があった肥前国神崎荘は、平安時代以来、有明海における交通・交易の要衝であった。そして築地の浄光寺もまた、菊池川河口部の要港・高瀬に近接した位置にある。

中世東アジアの対外関係の基盤となった東シナ海をまたぐ海商のネットワークに類する商業・交通ネットワークは、ユーラシア大陸の海・陸各地に形成されており、モンゴル帝国によるユーラシア大陸の大半の制圧は、それらのネットワークをひとつに連結するものだった。それは西ヨーロッパ勢力が主導した大航海・近世グローバリゼーションの歴史的 premise に位置する、世界史的な事件であった。その一環であるモンゴルの日本侵攻に対抗するための、鎌倉幕府の交通編成と連動しつつ、真言律宗は臨済宗とならんで西国・九州に教線を拡大していった。幕府の関与のもとに、その頃に創建されたと推定される浄光寺も、そのような「世界」のなかの中世日本の社会史・仏教史のなかに、歴史的立場を持つものなのである。

4. 浄光寺と地域社会

近世に干拓される前の菊池川河口部の海岸線は、現在の国道501号線の辺りであったと推定される（規工川 1989）。中世には河口からほど近い位置だった高瀬は、有明海の海上交通と、玉名・山鹿・菊池郡域を貫き菊池川の上流にまで至る、水上交通との結節点となる、地域の要衝の港として小都市的景観を形成していた⁽³⁾。そしてそれは、博多・五島列島-有明海-南九州-南西諸島と連なる、海上交通ルートの一部を占めていたのである。

このような高瀬は、中世には筥崎八幡宮領の大野別符（おおよそ旧岱明町域から菊池川西岸までの範囲の地域）の東南域に含まれていた。別符とは、当時の地方行政機関である国府から、特別に開発の許可を得た所領のこと。先述の「太政官符」のように、律令制では上級機関からの許可証等は「符」という様式の文書によった。つまり「特別の符」を得た所領というわけである。別符はふつう、開発の責任を負うことと引き換えに、税の減免措置をうけた。筥崎八幡宮は、博多からやや東に位置する、京都・石清水八幡宮の末社。八幡神発祥の地・宇佐八幡宮の神宮寺で



【凡例】

- 寺院として現存
- 址地として知られる
- × 地名が残ри、所在を窺える
- 所在国名だけ知られる
- ②・④・⑨は推定地域

第1図 九州の西大寺末寺位置図

ある、弥勒寺と一体化していた石清水は、管崎宮を交易センターとして、九州各地に獲得した末寺末社・荘園をつなぐ交通ネットワークを形成していた。そのなかに位置づけられる大野別符の確立は、1160年代後半頃、平氏の支配を軸に、九州の中世的体制の骨格が定まっていくなかでのことであったと思われる。

鎌倉幕府の後ろ盾のもとで浄光寺が建立された背景には、このような高瀬を近傍から睨み、その交通機能に介入するという目的があったと考えて間違いない。しかし、それには現地の諸勢力との利害調整・連携が必要となる。その受け皿となったのは、紀氏一族だっただろう。紀氏は玉名郡西部を拠点に、国府のスタッフも輩出した平安時代以来の勢力である。この地域が管崎宮領となる際にも、現地の取りまとめ役を務めたと思われ、別符内の開発で分出していった村々は、一族によって分割支配されていった。

しかし平氏が鎌倉幕府に滅ぼされると、九州は幕府による植民地支配のもとにおかれた。ただし九州各地の勢力は、多かれ少なかれ平氏の九州支配のなかに位置づけられていた者たちである。それらをすべて殲滅することは現実的ではないから、幕府は肥後の菊池氏のような大勢力だけを罰して、中小の勢力は温存するかわりに、東国の有力御家人を郡地頭などという広域管理者として配することで、地付きの勢力を監督・牽制する体制を樹立していった。玉名郡域には、隣国・豊後の守護に任じられ、後に戦国大名となる有力御家人・大友氏らが配された可能性が高い。大野別符のうち尾崎村は、鎌倉時代には大友氏の庶流・詫磨氏の所領となっている。紀氏は御家人と認められて地位は保全されたものの、大野別符全域を排他的に支配できる状況ではなくなっていた。

そして蒙古襲来を機に東国御家人が九州の所領に下向し、地歩を固めていくと、地付きの勢力はそれに圧迫されていくことになった。特に紀氏のばあい、北に接する野原荘に東国御家人・小代氏が乗り込んできたことが、決定的だったようだ。そのなかで紀氏による大野別符支配は危機に曝され、その結末も揺らいでいく。紀氏一族の本家は「築地」を名字とする、築地村を拠点とする家系だった。ところが、この頃には築地家と別の家との間に激しい紛争が展開し、そのなかで本家の地位も別の家に移動した形跡があるのだ。この後、一族結合のあり方が再編・強化されたらしく、室町時代に入る頃に一族は、大野別符の「大野」を、その名乗りとしていくことになる。

紀氏が鎌倉後期の危機を克服していくうえで、幕府との結びつきを強めていくことは最も有効な手段だった。たとえば紀氏は、鎮西探題の訴訟実務要員として下向し、肥前に所領を得ていくことになる東国御家人・安富氏に接近をはかっている。おそらく、内・外の紛争解決での援助を期待してのものだろう。別符の中心地・築地における浄光寺の創建もまた、そのような幕府との

連携の模索のなかで、実現したものと考えられるのである⁽⁴⁾。

5. おわりに

冒頭で述べたように、浄光寺についての文献史料はきわめて乏しい。しかし視野をひろく九州全体や、さらに東アジア規模にまでとり、一方で地域の情勢に深く分け入っていくことで、その歴史的位置を陰画のように浮かび上がらせることは不可能ではない。モンゴル帝国の成立という世界史的イベントのインパクトによる中世日本の激動と、地域社会のこまやかな律動。その交差するところに、浄光寺は生まれたのである。

注

- (1) 田邊哲夫は浄光寺の創建者・恵空を、功德院流快雅・皇圓・成源・信空（叡尊の弟子）などに師事した慈胤の弟子とする（熊本県玉名市教育委員会 1989 など）。ただしそこで典拠とされている「密教系譜」については不明。これが佐和隆研編『密教辞典』（宝蔵館）付録「密教系譜」を指すのだとすれば、管見の限り、そこに恵空にいたる系譜は確認できなかった。
- (2) 八尋 1976 をもとに田邊哲夫（熊本県玉名市教育委員会 1989）が補訂したものを一部修正し転載した。
- (3) 本項目での高瀬・大野別符およびその領主・紀氏についての記述は、小川 2005 にもとづいている。
- (4) 浄光寺については『肥後国誌』などの近世・近代地誌類に、平清盛の息子・重盛による創建伝承が採られている。中世の同時代史料による裏付けのない伝承を、そのまま事実とみるわけにはいかないが、鎌倉幕府による禅・律寺院の創建事例のなかには、既存の天台宗などの寺院を再興・宗派替えしたものも多い。よって伝承には何らかの事実が反映されており、浄光寺には平安末期ないし鎌倉時代前半のうちに創建された先行寺院が存在した可能性は否定できない。一方、築地村を皇圓阿闍梨の出生地とする伝承は、中世の同時代史料はもちろんのこと、「本朝高僧伝」や『肥後国誌』など近代初頭までの史料には確認できない。管見の限り、それがはじめて記された文献は、皇圓阿闍梨が投身・龍に変化したとされる静岡の桜ヶ池にある、池宮神社社務所の発行した「遠州桜ヶ池由来記」（大正 12 年（1923）初版。大正 15（1925）・昭和 3 年（1928）に「修訂」が重ねられており、見ることはできたのは昭和 3 年版）である。出生地伝承の検証は、現状の文献史学のかさをこえるものといえよう。

【引用文献】

網野善彦 1974『蒙古襲来』小学館

小川弘和 2005「古代・中世編」『岱明町史』岱明町

熊本県玉名市教育委員会 1989『浄光寺跡寺域確認調査』

黒田俊雄 1975『日本中世の国家と宗教』岩波書店

規工川宏輔 1989「中世の海岸線を引く」熊本地名研究会編『甞る熊本の中世』秀巧社

松尾剛次 2010『中世律宗と死の文化』吉川弘文館

八尋和泉 1976「筑前飯盛神社神宮寺文殊菩薩騎獅像および豊前大興善寺如意輪観音像に

ついて-九州西大寺末寺の仏像新資料二例-」『九州歴史資料館研究論集』2

渡邊 誠 2010「十二世紀の日宋貿易と山門・八幡・院御廨」同『平安時代貿易管理制度

の研究』思文閣出版、2012年に再録